

# 「さあ、みんな、考えよう」

## 第11回 全国人権・同和教育研究大会 三重大会開催

トモトモ  
地元テーマ

### 人権文化を確かなものに

～ 29市町の組織力と取組をさらに深めて～



11月30日(土)、12月1日(日)に津市で上記の大会が開催され、全国から1万人が集い、実践報告が行われました。今回の通信では、大会1日目の全体会で行われた地元三重県からの特別報告の概要をお伝えします。

### 特別報告 「人権文化を確かなものに 一人ひとりが主人公」 ～世代と・職域と・地域と越えてつなぐ～

#### 報告のテーマ

「部落問題の当事者って誰ですか?」「部落問題を自分事にする」って、一体、何をどうすることですか?」「みなさんは、差別を残す当事者ですか?」「それとも、差別をなくす当事者ですか?」  
昨年開催された「第52回三重県人権・同和教育研究大会」の地元報告で、青年や高校生たちは私たちにこう問いかけた。私たちは、この問いにどう応えるのか。私たちは、これまでどんな人権文化をつくることができたのか。私たちは、これからどのような人権文化をつくっていくのか。一人ひとりの人権文化を、世代を、職域を、そして地域を越えてつながり合ったときにみえる景色をともに感じたい。そんな願いを込めて、6人の様々な立場の人から自分の今を伝える。

#### 報告の概要

**○三重の人権教育で育った学習者の立場から「私にもできること/私にしかできないこと」**  
(大学生の発信) 中学校から教育集会所で学習会に参加した。みんなが家族のこと、友達関係のこと、将来差別にあわないかと不安に思っていることなどを話してくれた。話したからといって、その問題が解決するわけでもない。でも、みんなも同じように悩み、踏ん張り生きていることがわかった。皆で一緒に前に進んでいる。人権について考えることは自分のことを考えること。部落出身の同級生たちと一緒に地域の学習会で学び続けて私が気づいたこと。社会に出てからも続けていきたい。

(会社員の発信) 中学校1年で、被差別部落出身の友だちができ、遊ぶ約束をした。おばあちゃんに「そこは危ないで行ったらあかん」と言われ、行けなかった。それが部落差別だと知った。自分のおばあちゃんが友だちのことを差別していて、ぼくもそれに荷担していた。今、教育集会所で話し合う場をつくっていて、自分の話をし、ひとの話をきいたりしている。これから、おばあちゃんとも話をし、なかまと活動を続けていきたい。自分にできることは自分より下の世代に差別意識を残さないこと。自分がしっかりした知識を身につけ、伝えていけるひとになること。

(教職員) 6年前にペルーから三重県に来た。学校で先生はスペイン語を覚えてくれて、いろんな場にぼくを連れて行ってくれた。いろんな国からの子がいて、困っていることを話したり、その国の良さを伝え合ったりした。ぼくは日本に来て、友だちをつくりたくて、必死に日本語を勉強した。あるときにいじめている現場を見て、「いじめ」という言葉を知った。初めて、知って嬉しくない日本語だった。その後、ぼくは勉強をがんばり、今、工業高校の先生をやっている。多様な人々が共生する社会、誰でも本当に安心できる社会をつくっていききたい。

### ○子どもの人権教育を応援する保護者の立場から「子どもが変わる/私たちおとなが変わる」

(保護者) 自分の子どもが小学校低学年の頃、友だちとのトラブルで学校や近所の方から苦情の電話がよくかかってきた。かかってくる電話がつかかった。なんでちゃんとできないのと子どもにあたった。4年になり若い男の先生が担任になった。あることがきっかけでその先生が子どもへの対応で私を叱ってくれた。家庭訪問にも頻繁に来て、子どものことで楽しいことをいっぱい話してくれた。その先生が初めてのママ友のようだった。私はこれから昔の私のようにこまっぺいるお母さんがいたら、先生がしてくれたように私がその人のママ友になりたい。「してはいけない」だけの人権教育ではなく、「誰かのために何かをする」人権教育に私も取り組んでいきたい。

### ○まちづくりを担う行政職員としての立場から「家族がいたからこそその私/まちづくりにつなげたい」

(行政職員) 中学校のころ、「差別はいけない」「差別はしてはいけない」と発言していた。母はパーキンソン病だった。それで家事などができない母の代わりに家のことをやった。母に暴言を吐いたこともある。そんな自分が「差別はいけない」と言っていた。調子の良いことを言いながら、家では母を差別していた。中学校で被差別部落出身の方から「部落に生まれたことを誇りに思う」という話をきいた。高校生になって人権サークルに入って、自分のことが語れるようになった。他のメンバーが自分のことを語る姿を見て、私も語りたと思った。人権活動を通して、少しずつ自分を変えていきたい。今、県庁で広く言えばまちづくりにかかわる仕事をしている。よりよいまちづくりにはひととひとの関わりがかかせない。人権学習や人権活動で培ってきたことを仕事でも日常でも活かしてこそ値打ちがある。

### ○教師として、母としての立場から「あらゆる人権問題の解決へ/私たちから未来の子どもたちへ」

(教職員) 「あなたは、地区学に行かずずっと勉強しやなあかんよ。それがあなたにできることやで」母は私に言い続けた。別の地域から嫁いできた母は、いろんな研修会に参加して、人権の勉強をした。「自分たちのまちが差別されるのはおかしい」とはっきりと言う母を見て育った。私は、障がいのある子を傷つけてしまったことがある。私にとって部落差別は受ける側。だけど、ほかの差別はする側になる。だから勉強し続けなければならない。私は小学校の先生になった。大好きなこのまちに戻ってきて、おっちゃん「どーや？」と声をかけてくれる。こんなあたたかいまちで子育てをするなか、娘たちに「差別に負けてほしくない」という願いができた。仕事を始めたころ、子どもたちの言動にイライラをつのらせていた私に、「いちばんしんどいのはあの子らとお母さんや」の一言が、それまでの私自身の子どもや保護者のとらえ方を見直させてくれた。お母さんは孤独感、疎外感のなかで子育てをし、子どもたちは不安や迷いを相手を攻撃する言動で表現していた。私はこの子たちに学力をつけたい、自分に自信を持てるようにしたいと思った。今、私が勤務する学校には被差別部落はない。でも、いろんな生きづらさを背負わされている子がいる。そんな子どもたちの姿を見ながら、「いちばんしんどいのはあの子らとお母さんや」のことばを思い出す。日本語がわかりにくいお母さん、特別支援学級に在籍する子どもの保護者、いろんな願いをもって学校に送り出してくれている。私にとって部落問題はもちろん、障がい者の問題も、外国人の問題も他人事ではない。放っておけないこと。自分ごとと考えたいこと。「相手を大事にすることが人権の問題を自分ごとにするこた」母が働く姿で教えてくれたこと。目の前の子どもたちも私の娘も全ての人が端っこではなく、堂々と自分の進みたい道の真ん中を歩ける、そんな未来をみなさんと歩いていきたい。そして次の世代につないでいきたい。